

14. 花煞

川島が『語絲』六六期で花煞を取り上げ、そして高調班の花煞が“某君に大いに片付けられるところを見られた”話を覚えているかと尋ねられた。この芝居をわたしは知らないが、それでも花煞というものは知っている——いや、人が言うのを聞いたことはある。愚見によれば、煞とはもともと死人自身であり、最初は彼の体魄で、後になって彼の靈魂だとされ、その様子は鶏のようだという。（凡そ往来が忽ちのうちで、あるいは陰湿な場所に出没するものは、いずれも常にそれで魂魄を代表させる。例えば蛇虫鳥鼠の類である。ここは本来飛ぶ鳥であるべきだが、後人は見識が日ごとに卑陋になり、彼らは毎日目の前にいる鶏や家鴨のほかはほとんど他にどんな鳥がいるか覚えていないので、ただそれは鶏だと言い、それが飛べるかどうかなど構わないのである。ここまで言うと、紹興の靈前に置かれた二羽の紙の鶏は、たぶんやはりこれを代表するものだと思う。紹興人はそれは死者にくっついてあの世に行き痰を食べるのだと言い、そして中国人は痰を吐くのが確かに好きだけれども。）又後になってからは煞神と称され、まるで“護送人”のようなもので、しかも雄鶏・雌鶏の二羽になるのだ。花煞（方言音ではHuoasaaと読み、第二字はふつうはSaehと読む）については単に結婚の時に喜んで人をなぶる悪鬼のようなもので、結婚する本人とは別に係属の関係はない。野蛮人の世界では四分の一が生きた人間で、三分の一が死鬼で、そのほかは全て精霊鬼怪である。この第三種が全数の十二分の五を占めるもので、今では精霊鬼怪と総称され、“西儒”〔西洋の学者〕はこれをダイモン(Daimones)と呼び、中には必ずしも穏やかで良いものが絶無だということではない。だが大抵はどれも凶悪で、ひとの災厄を楽しむもので、文化が幼稚で、彼らがまだ神に昇格しなかった時には、恐らくどれもがそうであつたろう。彼らは時々刻々生きた人間を傷害しようと機会を待っている。これは彼らにとって何の良いところもないのだけれども。しかもその時でさえ、天帝に対抗して、彼らを派遣してゴタゴタを起こそうとする悪魔はまだいないのである。しかし生きた人間もバカではなく、連中のいいなりになるものではなく、避けたり抵抗したりする術も知っているから、連中はよい機会を伺い、人々があまり反抗できない時に手をくださねばならない。例えばあくび、くしゃみ、居眠り、食事、思春期、出産、——このほか最もよいのに自ずと性行為があり、特に最初の性交である。題と切り離してここまで来たが、すでに花煞には来てしまった。おお、本題となると、わたしには何も言えることがない。というのは紹興の花煞の伝記に関してはわたしは実際あまりにも知ることが少ないのである。ただ男の家が駕籠を出す時に例によって誰かが袍褂〔羽織袴の如し〕を着て、（いまではたぶん烏殻帽を被るのだろうか。）鏡一枚、熨斗一つと燭台一つを手を持って駕籠の中をでたらめに照らし、“駕籠探し”の儀式を行う。これは当然そこで鬼を探すのであるが、探すのはどうも花煞ではないようだ。なぜなら花煞は相変わらず花駕籠にくっついて来るのだから。まるで凡そ花駕籠には必ず花煞がいるのだと言えるようだ。むろんこの駕籠は本物で、中に一人座っていなければならない。この怪物はたぶん花駕籠と何か神秘的な関係があるのだろう。わたしは確かなことは言えないけれども。要するに男女が部屋にいて花駕籠を使わないと花煞などいると聞かない。嫁さらいや、童養媳や、納妾など、田野草露に至ってはむろん言うま

でもない。誰かが花簾に衝突すると死ぬか少なくとも重病になり、その祟りは又新郎新婦以外のそばの人間に及ぶそうである。あるいは女性は全身真っ赤な着物を着ており、又薫香を焚き染めていたりすると、それだけで十分な防御になる、いわゆる備えあれば患なしなのだろうか。

※初出：1926年3月1日『語絲』第68期